



### ● 猛暑でダウン寸前の欧州 原子力発電所

例年にない猛暑が訪れている欧州各国で、原子力発電所が出力を落とした稼働を迫られている。これは、機器の故障ではなく、干ばつによる河川水の取水制限(水位、水量低下)、及び温暖化による河川水の水温上昇により温度差がとれない為である。さらには原発の

冷却システムから出る高熱を持った排水が国際河川の水温を上げ、生態系に悪影響を与えることが懸念されているためだ。

特にフランスでは深刻で、総発電量の80%が原発による発電であり、いままで近隣諸国へ電力を輸出し外貨を稼いでいたが、今は毎日2ギガワットの電力輸入国になっている。フランス国内58基の原発の内、37基は河川水により冷却を行っているが、さらに続く熱波の為、電力需要はうなぎ

登り、この機を逃してはならずと、電力会社のロビイストは政府を説得、2003年の夏に続き、今回も環境基準を上回った温度(25℃)の排水を流すことが特別に許可された。(7月24日)

これに対し環境保護団体は、フランス政府は原子力をクリーン・エネルギーだと宣伝してきたが、いまや環境、特に生態系を破壊しているのは原子力の方だと強く批判している。

他方、ドイツでは、「環境を守る」姿勢の電力会社

が多く、原発の稼働率を落とす決断をする電力会社が出始めた。エルベ川沿いの原発ではおおよそこのような措置が取られている。しかし、ドイツ国内にも、背に腹は代えられずフランスと同じように環境基準を超えた温度の排水を認めさせようとする動きが起こっている。

地球温暖化対策の決め手と言われた原発が、温暖化の影響を最も受けているという皮肉な現象が欧州で起こっている。(Y)